

感を以て接するが如き事あらば、是聖戰の讀者でなくて何であらう。

日華親善の基調は、中國に對する日本の眞義を徹底せしむるに在り、更にその根源を成すものは人と人との誠を以てする結合に在る。將兵の一舉手一投足は、盡く此の誠を實踐するの精神に發すべきであり、又其の實踐に當つては、大御心に基く心からなる善隣の友愛と、信を人の腹中に置く底の大襟度とを根抵とすべきである。

(三) 中國人の傳統習慣を尊重せよ

民族には夫々の傳統がある。中國人の性格、傳統、習俗等を辨へず、専ら日本人的感情乃至は所謂軍人的氣質を以て彼等に應對し、甚しきは無意味に之を強制することに依つて、却つて逆効果を生じつつある例は決して尠くない。

又警備の上に於ても、往々精神的方面を忘れて單に形式にのみ拘泥し、殊更に中國人の以て不快とする措置を強行し、顧みて其の民心に與ふる影響の重大なるを想はざるが如き傾向もなしとしない。

斯くて、不知不識の間に相手の面子を傷け、干涉に流れ、不用意なる言辭を弄して暗に反

感を買ひ、或は自己の感情に激して公衆の面前に於て自省を缺いた言動を敢てする等の所爲に依り、皇軍に對する和親の情を一瞬にして失ひ去るばかりでなく、永く其の恨を残すが如きことがあつては日華兩國民の精神的融合は正に、百年河清を待つに等しく、聖戰の前途また、憂慮に堪へぬものがある。派遣軍將兵は、自ら持すること嚴に、人を待つこと寛なるとき民心は求めずして吾れに歸依すべきことを知るべきである。

(四) 日華親善は派遣軍より

派遣軍が日夜作戰、討伐、治安警備等に任じてゐるのは、一面重慶に對する磨徴であると共に、又新中國建設への協力であつて、此處からこそ新しく正しい思想と秩序とが、日々生まれ育ちつつあるのである。斯の如く戦ひの直後に建設の營みの隨ふことが大東亞戰爭の特長ある一様相とも謂ひ得よう。されば敵撃滅の一念に燃ゆる派遣軍將兵は、同時に四億民心を結束して其の更生建設をも成し遂げ得なければなぬ。

現在縦ひ、恐怖、反抗、憎惡、懷疑等の思想が民心の底に流れてゐやうとも、ひたすらに大御心を體し、純一無雜の心境に立つて正しく進み、正しく征くとき、日華偕行の大道は

自ら脚下に展げゆく筈である。かくて常住巧ますして唯その近きを治むれば、油の物に滲みるが如く、音もなく響もなくとも遠きもの亦必ずや風を望んで靡くであらう。

銘記せよ！我が派遣軍將兵「日華親善は先づ派遣軍より」の信念を護持し、挺身皇道を宣布することによつて始めて聖戦が美しいその實を結ぶのである。これ即ち日本と相携へて共苦敢闘を辭せざる中國の盟友に對し、速に完勝の慶びを頌ち同甘の樂みを俱にし、以て日華永遠の共榮を齎す所以の道に外ならぬ。

(五)常に爾他の戦場と銃後の勞苦とを想へ

大東亞戦争は一億國民上下盡くが眞に大詔のまにまに國家總力を擧げての聖戦である。南に北に、大東亞の海、陸、空を蔽ふ各々の戦場は云ふも更なり、銃後に於る各戦域の辛勞亦眞劍なる「戦ひ」である。又我等の戦線直後には敢然海を渡つて進出し來つた同胞があり、これ亦我等に協力して建設の難業と戦ひつゝある。

大東亞戦争下の「戦ひ」は決して吾等のみではないことを銘記せよ。而して吾等は戦線直後に隨ひ來る此等建設戦士には皇道宣布の先驅者としての範を垂れ、共苦を敢てする銃

後の熱誠に對して常に心からなる感謝を捧げ、必勝以て之に答ふるやう我等の戦ひを戦ひ抜かねばならぬ。

之を要するに、派遣軍將兵が眞に皇軍たるの面目を發揚し、破邪顯正の劍を揮つて撃つべきは撃ち恩愛の至情を披瀝して慈しむべきは慈しみ、恩威並び行つて誤らざるとき四億の民心は期せずして吾に歸し來るであらう。所詮御稜威に靡かね敵はなく、此の信念を措いて聖戦の目的完遂の道はあり得ないのりである。

全軍の將兵は、茲に恭しく宣戦の大詔を奉戴し英靈十萬の志を繼ぎ銃後一億の熱誠に應へて益々勇戦敢闘全力を奮つて一意聖戦完遂に邁進し、誓つて宸襟を安んじ奉らんことを期せねばならぬ。

エトクニ-11





